

COBALT-SERIES

流花と憶昔前世譚
真神！
転生
幻話

一藤木杏子

いっとうぎ・ようこ

本名・渡辺かおり。1962年2月17日、横浜生まれ。水瓶座、AB型。'83年第1回コバルト・ノベル大賞に『たとえば、十九の時のアルバムに』が佳作入選。趣味は旅行、アニメ、英会話。著書に『くどき上手なピーターパン』『ラスト・シーンではほえんで』『ファースト・シーンはろまんていっく』『恋のむこうにオフロード』『恋のルートをかけぬけて』『風色ロマンスごいっしょに』『エンドマークは乙女ちっく』『えびろーぐはファーストKISS』『½・フシギの七日間』『時の彼方でだきしめて』『花月夜にみる幻想は……』『今宵ときめきスキャンダル』がある。



真神・転生幻話

COBALT-SERIES

1992年10月10日 第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著 者 一 藤 木 杏 子

発行者 若 菜 正

発行所 株式会社 集 英 社

〒101-50

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
(3230) 6 2 6 8 (編集)

電話 東京 (3230) 6 3 9 3 (販売)
(3230) 6 0 8 0 (制作)

印刷所 凸版印刷株式会社

©YÔKO ITTÔGI 1992

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611688-X C0193



COBALT-SERIES

ま か み てん せい げん わ
真神・転生幻話

一藤木 杳子

集英社

目次

真神・転生幻話
まかみ てんせいげんわ

プロローグ……………8

I 夢幻花……………9

II 使者……………28

III 和都……………53

IV 伝承……………80

V 出陣……………104

VI 襲来……………151

VII 忘我……………169

VIII 対決……………185

エピローグ……………226

あとがき——おしゃべり通信VI……………232

登・場・人・物・紹・介

慎吾しんご

流花のふたいとこで幼なじみ。東京の大学に進学しようとしている。

流花るか

神代の“魔を封じる力”を受けつぐ不思議な少女。事故が原因で異空間に飛ばされ…。



鷹生^{たかき}

和都の国を守る若
武者で慎吾の前世
の姿らしい。

花衣^{かい}

戦国の世に生きる巫女。流花
の前世の姿で、どうやら流花
は彼女に同調したらしい…。

将^{しょう}

鷹生の兄。ふたりの
どちらかが中禅寺の
剛の者なのだが…。

信守^{のぶもり}

和都の国の後継者。それ
を不満として家臣の江済
が内乱を起こし…。

イラスト／田村みゆき

真神・転生幻話

プロローグ

夢の中の情景は、いつも舞い散る桜。

乱舞する花のむこうに、おぼろげにたたずむ若武者の姿。

——あなたは、だあれ？

遠い記憶の彼方^{かなた}。見知らぬはずなのに、なぜか、ひどくなつかしいひと。

誰なのか、わからないのがもどかしくて、懸命^{けんめい}に桜の中を駆けて。さしのばした指先がその姿にふれたと思った瞬間、眼^めがさめる。

十八の春、あたしはそんな夢を幾度もみていた。

I 夢幻花

季節は、まだ浅い春。

柔らかな金色の陽光があたりを染める夕暮れ、あたしは中禅寺さんちへの坂道を登っていた。

——流花に見せたいものがあるんだ。ついでの時にでも、ちょっと寄ってくれないかな。慎吾くんが、そうTELをくれたのは、昨日の夜のこと。

中禅寺慎吾くんは、あたしとはふたいとこで、幼なじみ。小さな頃からいつも一緒だった、大好きなひと。

けれど……。

桜並木の坂道をてくてく歩きながら、知らず知らず、ため息が唇からこぼれてしまう。高校生活最後の春休み。明日は卒業式。

それが終わると、慎吾くんは東京の大学へ行ってしまう。

今まで、ずっとそばにいてくれたのに、初めて遠く離れてしまう……。

間近に迫った別離に、やるせなさをかかえて歩いていると。ふわり、と花びらが肩に落ちてくる。

——桜？

あたしはいぶかしく思いながら、顔を上げる。

まだ桜が花をつけるには、早すぎる季節。

頭上の桜の枝を見つめても、もちろん花など咲いていない。

なのに、どうして花びらなんて……。

首をかしげながら、再び自分の肩に視線をあてて、あたしは小さく息をのんだ。

確かに肩に落ちたはずのその花びらは、服にも足もとにも見あたらず、いつのまにか消えているのだ。

あたしは眼を細め、もう一度、桜の大木を見上げる。

不可思議な——桜幻想。

……そういえば、今朝がたもまた、あの夢をみたわ。

舞い散る桜の中、誰か——ひどくなつかしいひとがたたずんでいる情景。

いったい、あの夢は何なのかしら……。

今しがた眼にした幻花。慎吾くんのこと。こここのところ、幾度もみている不思議な夢のこと。

考えることがいっぱいあって、あたしは桜の大木を見上げながら、じっとその場に立ちつくしていた。

「こんにちはー」

坂の上のお寺、中禅寺さんち。木造りの大きな門をくぐり、玄関で呼び鈴を押すと、出てきたのは慎吾くんのおじいちゃんだった。

「おや、流花ちゃん。いらっしやい」

「こんにちは、おじいちゃん」

髪も髭も真っ白なおじいちゃんは、藍色のどてらを着こんで、にこにこ笑いかけてくる。

「あの、慎吾くんは……」

「慎吾なら、自分の部屋に思うが。さあさあ、上がりなさい」

「あ、はい。おじやまします」

「今日は朝から、何やら部屋の整理をしていたようじゃ」

「そう、ですか」

玄関に上がり、靴をそろえながら、あたしは小さくうなずいた。

……そうね。卒業式がすんだら、東京で下宿するんだもの。荷物だってまとめてしまわなくちゃね。

「そういえば、流花ちゃんは地元の短大に進むのじゃったな」

先にたつて廊下を歩いていくおじいちゃんにたずねられ、はい、とあたしは返事をする。

「K市にある短大で、民俗学みんぞくがくをやりたいな、って思ってます」

現実現実に織おりこまれた、不思議。古代から受け継がれてきた、人々のところ。いろいろ考えたすえに、伝説や民話——そういったものを勉強しようって決めたんだ。

「しかし、ナンじゃな、慎吾が東京に出してしまうとワシらも寂さびしくなるな」

廊下を歩きながら、おじいちゃんがぼつりと言い、あたしはそっと眼を伏せる。

慎吾くんが進むのは、東京にある武道の名門、光和大学こうわ。弓道や柔道の腕を見こまれて、ぜひにとスカウトされたんだ。

そうこうしているうちに、慎吾くんの部屋の前。

「慎吾、流花ちゃんがみえたぞ」

おじいちゃんに呼ばれ、中から慎吾くんの声が返ってくる。

「どーぞ、とっちらかってるけど、入ってきてくれ」

言われて、ドアを開けると。

床に積まれた本やCD。隅すみに丸められた服。壁にたてかけられた竹刀しなひと弓。十八年間の所持品が散乱した部屋の中に、慎吾くんがいた。

「よっ」

足の踏み場もないような部屋の真ん中に、あぐらをかいてすわりこんで、こちらに笑いかける。

「わざわざ来てもらって悪かったな。テキストにそのへんすわって」

「あ、うん」

返事はしたものの、とてもすわれるようなスペースが見あたらずに。入り口に立ったまま、あたしはきよろきよろしてしまふ。

「何じゃ、このありさまは」

あたしの横で、おじいちゃんがあきれたようにたずねかける。

「何って、見ての通り整理してるんだけど」

「これでは片づけているのやら、ちらかしているのやら」

「一度、全部ひっくり返してから、片づけたほうがてっとり早いんだ」

あきれ顔のおじいちゃんに、頭をかきながら、もごもごと弁明する慎吾くん。

「まあ、よいか。これを全部片づけるのは、どうせ本人じゃし。……それでは、流花ちゃん、ゆっくりしていきなさい」

「はい、ありがとうございます」

ぺこんと頭を下げるあたしに、おじいちゃん、にんまり笑う。

「年よりは退散するので、若い者同士、仲よくやりなさい」

意味シなセリフと微笑に、慎吾くとあたしは顔を見あわせる。

……おじいちゃん、いったい何を考えてるのかしらん。

「あ、そうじゃ、慎吾」

「はい？」

廊下を歩き出しかけたおじいちゃん、くるりとふりむき、またまた意味ありげに笑う。

「ところで、どうじゃろうな、あの件は」

「は？ あの件って……？」

眼をぱちくりさせる慎吾くんに、じれったそうに言い放つ。

「ええい、とぼけるでない。おまえと流花ちゃんの婚約の件じゃ」

あたしたちはふたりそろって、ぎよっとおじいちゃんを見た。

以前、慎吾くんとあたしをパニックにおとしいれた、婚約騒動。

お、おじいちゃんってば、まだあの話、あきらめてなかったの。

「おまえの嫁には、やはり流花ちゃんが一番じゃ。今からでも遅くないぞ。どうじゃ、ふたりが離れて暮らす前に、せめて婚約だけでも——」

トートツに婚約の話なんてむしかえされ、アゼンとするあたしたちにはおかまいなしに、熱心に続けてよこす。

「ナンだったら、今すぐ祝言しゅうげんでもかまわんど。墓に入る前にぜひ、静香しずかだけでなく、慎吾の

ほうのひ孫の顔も見たいのでな」

「……（絶句）」

「まあ、とにかくふたり仲よくして、早いところ、この老人を安心させておくれ」

——などと、言いたい放題言う。おじいちゃん、はっはっはと豪快に笑いながら去っていく。

「……ったく、じーさま、あいかわらずムチャクチャなんだから」

後ろ姿を眺めつつ、慎吾くんがあきれたようにぼやき、あたしはどぎまぎして赤くなってしまう。

もうっ、おじいちゃんってば、ホント、短絡的たんらくてきなんだから。

それに。おじいちゃんは簡単に言ってくれちゃうけど。そんな先のこと、わかるはずがない。

慎吾くんはこれから東京の大学に進んで、広い世界で、たくさんの人や出来事にあうんだから……。

「ま、まあ、流花、とにかく入って」

おじいちゃんのこととはひとまず横において。手招きされ、あたしは散乱した荷物をよけながら足を踏み入れる。

慎吾くんは近くにあった荷物をどけてくれ、あたしのすわるスペースをつくってくれと、